

茶道史の 一こま

——天正十八年十月豊臣秀吉湯山阿弥陀堂茶会について——

森 田 雄 一

はじめに

文書館の相談業務の中に、時折、書・画賛・消息などの内容の質問や説明をして欲しいと来館者から依頼されることがあるが、解説などは原則として判読不能部分のみとし、出来得るものは或程度の対応をしている。以下に紹介する文書は、茶道史の記録としても良質のものと思われるので、敢えて例示する次第である。

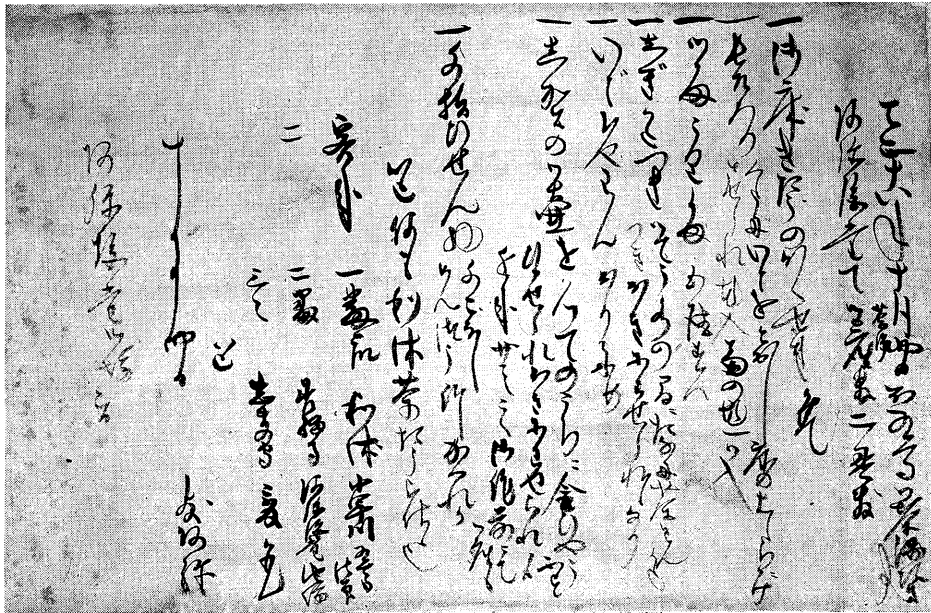
一

天正十八年（一五九〇）九月豊臣秀吉は、小田原北条氏をはじめ奥州を平定して帰洛し、九月二十五日より十月十四日まで休養のため、摂津の有馬温泉に赴き、半歳にわたる戦陣の疲れを癒した。この間十月四日には、湯山の阿弥陀堂において、茶会を催していることが、五島美術館所蔵の「北向道陳茶会記」と称される一軸により

知られている。（写真一）それによると、茶堂は千利休で、秀吉所有の虚堂墨蹟・鳴肩衝などが道具として使用され客として、一番 千利休・小早川隆景・有馬則頼、二番 善福寺住持・阿弥陀堂坊主・池坊専好、三番 寺沢広高（山崎片家カ）・津田宗及・瀬田正忠の三組九名が招かれていることが判明している。

二

ところで、近年浦和市在住の加藤勝重氏が蒐集し、本館に持参された文書がある。（写真二）冒頭部分が一部欠損し、水損のための磨耗が著しいものであるが、筆跡・料紙からみて、少なくとも慶長期を下らないものと推定される。幸いにして欠損部分は前出の茶会記により補充することが出来るが、これによると前出の茶会記は、参会者の半数を記したに過ぎないことが判明した。因みに残りの人びとは、四番 小寺高友・施業院全宗・竹田定加、五番 長谷川宗仁



天正十八年十月四日 於有馬御茶湯次第事

阿弥陀堂て茶湯御座敷二畳敷

一御床 きたうのほくせき かけて

一長左衛門か くだにいととおし床のはしらニかけ
させられ 花入 菊の物一ツ入

一御かま うりかま 五徳すへ

一志ぎかたつき いてう水の間ニたなに茶わんかた
つきおきあわせられ候なり

一いどちやわん おりため

一志質の御壺 をかつてのうちに金ひやうふを
ひかせられおきあわせられ候

近來サミ之御作前ニて御座候

一水指 ひせん物 水こほし 竹かくれか

めんつう

以上何も利休茶たう被仕候也

客来 一番衆 利休 小早川 有馬法印

同 二番 善福寺 阿弥陀堂 池坊

三番 志まの守 宗及 かもん

以上

十月四日 教阿弥

阿弥陀堂御坊

まいる



天正十八年四月四日

上様於湯山阿弥陀堂御茶湯有之

一 虚堂墨蹟

「

「入

「盤カ

「

「

以上

一 関白様 薬院

五日

隆景一人
利休

一 茶入奥山肩衝

一 瀬戸天目

一 高麗筒花入

テアリ

一 瓢箪炭取

一 柴菴大壺

以上

何れも茶堂利休

一番 利休

隆景

有中

二番 善福寺

阿弥陀堂

池坊

三番 宗及

山志摩守

一ノ湯 掃部

四番 休夢

薬院

竹田法印

五番

下刑法

宗安

樋ノ口

六番 柘左京

毛利壹岐

以上

・万代屋宗安・樋口屋紹札(カ)、六番 柘植與一・毛利吉成の三組八名と推定される。また豊臣秀吉は、翌十月五日にも同じ阿弥陀堂で、小早川隆景一人か、或いは施薬院全宗・小早川隆景・千利休の他に氏名不詳の者一人を招いて、(この文書上からはどちらとも云えないが)前日とは異なる道具組みで、茶会を催していることがわかる。

おわりに

天正十八年八月十七日から翌十九年閏正月二十四日にわたっての記録と云われる「利休百会記」は、前後に頻繁に茶会が開かれているにも拘らず、九月二十四日から十月二十五日までの一カ月の間記載がなく、空白期間となっている。これは、利休が秀吉に随行して有馬温泉に赴き、留守であったことと推察すれば納得し得るし、利休の晩年の行動の空白を補う史料として、この文書は評価し得るものと思われる。